

## ELF場面のコミュニケーション研究をどのように活かすか

総合政策学部4年 遠藤 忍 (70701546 / s07154se@sfc.keio.ac.jp)

本レポートでは、『媒介言語論を学ぶ人のために』の第7章「媒介言語としての英語の実際しよう場面」を題材に、English as a lingua francaとして英語が使用される談話場面のコミュニケーションパターンに関する研究をどのように活かすべきかを検討したい。ELFの実際のインタラクションを対象にした研究はまだ少ないのが現状であるが、フェアブラザーは7章を通じていくつかの特徴を概観している。そうした特徴が判明したことだけでも研究としては意義深い。しかし、そうした知見をどこに活かすかが、コミュニケーションパターンの研究をさらに押し広げることにもつながるだろう。

さて、ELF場面のコミュニケーションは、非母語話者間で英語が使われる際に発生するものである。その場合、参加者は非母語話者であると同時に、その場面は異文化の接触場面となる。しかも、それぞれ異なる文化を背景とするコミュニケーションの参加者は、自分の文化を背景として、ELFを使用しているようである。したがって、ELF場面のコミュニケーションの特徴は、参加者が非母語話者であるということももちろん、参加者が自分の文化を背景に英語使用をしているということが挙げられる。

参加者が非母語話者であることによる特徴としては、以下のようなことが挙げられる。まず、言語能力的な側面として、発音が明瞭化して言いたいことを明確化する、語彙や文法は難しいものが避けられたり相手にあわせて変更されたりする、言語表現自体のバリエーションが少なく直接的な表現になる、などの特徴がある。話題の選択においても、here and nowの難しくない話題が選択される傾向にある。また話題転換がスムーズではない割に、話題転換が多いという特徴も挙げられる。さて、コミュニケーションにおいて起こりうる意味解釈の問題は、本来であれば意味交渉（本文では調整と呼ばれる）によって乗り越えられる。しかし、ELF場面での会話では、意味交渉が少ないという傾向があるようだ。これは、コミュニケーション上の問題を話題転換で対応する「let-it pass principle」が働くことによる、とされている。こうした単純化は、参加者の英語の言語能力や言語知識とは関係なく起こるというが、発端は参加者が非母語話者であるということであろう。こうした、非母語話者間のELF使用場面は、互いに協力的かつリラックスした雰囲気のもとに行われるとされている。

一方、参加者が、それぞれ自分の文化を背景に英語使用をすることによって、以下のような特徴がみられる。たとえば、英語能力の良し悪しが参加者間のパワーに差異を生んだり、意味交渉において非協力的あるいは高圧的な態度を生んだりすることがある。特に、競争環境や教育場面においては、意味交渉が問題を生んだり、相手の面子を脅かすことにつながるようである。それは、話題の選択や会話スタイルに、参加者それぞれが持つ文化に影響されているからであり、参加者は文化的に異なる規範によって表現と解釈を行っているということが言える。

では、そうした問題を生まないインタラクションはどのように解釈すべきだろうか。それは、意味交渉が行われていないことは協力的態度の表れではなく、コミュニケーションが表面的になっている「平行モノログ」に過ぎないということであろう。表面的に理解しているように見えて、内面的には誤解があるか、相手とのインタラクションが重要ではないと捉えられているのかもしれない、ということだ。

ここまで見てきた、ELFの特徴に関する研究から得られた知見について、フェアブラザーは、ELFの英語を、欠陥というよりも独自の特徴を持ったものとして捉えている。独自の特徴を持ったものとした上で、フェアブラザーはこれらの知見を言語教育に活かすべきだとしている。つまり、非母語話者の英語学習者は、多くの場合ELF環境において英語を用いることが想定されるため、ELFとしての英語教育、あるいはコミュニケーション能力の育成を訴えている。カナガラジャからの引用として「言語学習は、限定された言語ルールの習得と見なすよりも、様々な場面で適切にコミュニケーションするためのプロセスとして考えた方が良い」ということを挙げている。

フェアブラザーがこの引用に基づいて、ELF場面のコミュニケーション能力育成を志向する英語教育を指摘しているのは、歓迎されるべきことであろう。英語が、非母語話者間のコミュニケーションにおいて用いられることが多くなってきていることを認識しつつ、そうしたコミュニケーションの参加者は、それぞれがもつ文化的規範に基づいて英語を道具として使用しているという認識に基づいた教育のあり方を指摘している。このことは、英語教育にたいして非常に大きな指針を与えるだろう。

しかし、日本における外国語使用場面は、なにも教育における場面だけに限られたものではないだろう。むしろ、教育現場において教えることよりも、実際に非母語話者間で英語を使ったやりとりがなされる現場に、研究の知見を活かしていくことの方がより重要ではないだろうか。たとえば、こうしたコミュニケーションパターンが起ころうということ、外国人が多く住む学生寮のLAや、外国人をサポートする行政の職員は分かっておかなければいけないだろう。もっと言えば、外交の現場やビジネスの現場においても、こうした知見は活かされるべきである。そうした、現にELF場面のコミュニケーションの参加者となっている人々を研修したりする際に、活かせるようになるのではないだろうか。

以上、稚拙ではあるが、ELF場面のコミュニケーションの知見をどのように活かすべきかを検討してみた。そうした、マクロな視点において、研究の知見をどのように活かすかを考えながら、ミクロな研究分析を進め、ELF場面のコミュニケーションを類型化できるようになることが望ましいと考える。現に、私自身の研究感心も、日本の学校英語教育におけるスピーキングに関する内容であるから、こうした分野に貢献できるような成果を残したいと考える。